

昭和肥料ニュース

FAX版



Vol. 042

作物を作る上で肥料や土壌改良材は欠かせません。しかしながら各生産資材のコストが高騰している今、「無駄使い＝効果の悪い使い方」は避けたいところです。今回は使い方のポイントである「施用する位置・時期」について考えてみました。

使い方の基本は「〇溶性」を知ること

肥料成分には水溶性、く溶性、可溶性と、水への溶けやすさの性質によっていくつか種類があることはご存知かと思います。

【水溶性 = 水に溶ける】

- 土壌中の水分に溶けて施用位置から移動する、水と共に吸収されやすい
⇒速効的な効き方⇒追肥向き(表土に施用しても一定程度効果が期待できる)

【く溶性・可溶性 = 水に溶けない(溶けにくい)】

- 根酸や微生物の分解作用で溶ける⇒作物生長に合わせ緩効的な効き方
⇒基肥施用が多い(長い効果で省力的、施用箇所の工夫で効果を引き出す)

例(1) く溶性りん酸⇒施用箇所からあまり移動しない⇒作物根の近くに局所的に施用⇒減肥に貢献する施肥技術

例(2) アルカリ分・鉄⇒作物根が張る範囲に万遍なく施肥(全層混和)⇒根にストレスがなくなり作物の安定生育につながる。

微生物の多い圃場は、施肥位置は適当でOK! ?

先日、プロ農家からお聞きした話ですが、堆肥・緑肥を使い、ミネラル補給を継続している自社圃場(弊社製品使用)と借地圃場ではpHと肥料バランス(土壌分析値)が良く似ているのに、生育に大きな差が出るそうです。

このことは、圃場の微生物が肥料分を取り込み増殖→死滅→他の微生物に取り込まれ増殖を繰り返すことで、圃場・根圏に広く栄養素が行き渡り、作物が利用し易い状態になった。つまり微生物の働きに差があるとのでした。

微生物を増やすためのエサになる有機物(炭素や腐植質)は肥料成分としてカウントされにくいですが、実は大切なようです。

土壌消毒が常態化した現在の圃場では微生物が少ないため、「作物の根の近く・根の伸びる先」へ肥料を置いておく(く溶性・可溶性の施用位置の工夫)、適期の追肥で追いかける(水溶性の追肥)と成果が良い傾向にあります。肥料を選ぶ際には、価格と成分内容と含有%だけでなく、溶け方の違いにも注意しましょう。最適なやり方を選び無駄なく効かせる。肥料をケチって減収(泣)、ではなく、工夫のある減肥で儲かる農業(笑)を実現しましょう!

お問い合わせは TEL 0766-67-2700 FAX 0766-68-1227
HPアドレス <https://showa-f.co.jp> まで、お待ちしております